薬師寺講堂・北面回廊の調査

（平城宮跡第２３３次調査　現地説明会資料）

１９９２．８．１１．

奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部
松本修自

１．概要

伽藍復興に先立つ調査で、発掘区は１９９０年度の調査区と、講堂をはさんで対称の位置にあたる。面積は約７００ｍ、１９９２年7月１日より開始し、現在継続中。

２．沿革

［講堂］

・養老２（７１８）　薬師寺を平城京に移築後、天平年間に至るころ創建か。
・天禄４（９７３）　火災により焼失
・貞元４（９７９）　再建
・享禄２（１５２９）兵火により焼失
・安政３（１８５６）再建（現存）

［回廊］

・中門・講堂と一連の創建か。
・天禄４（９７３）　焼失
・１１世紀ころ再建
・永長元（１０９６）地震により倒壊
・康安元（１３６１）再び倒壊

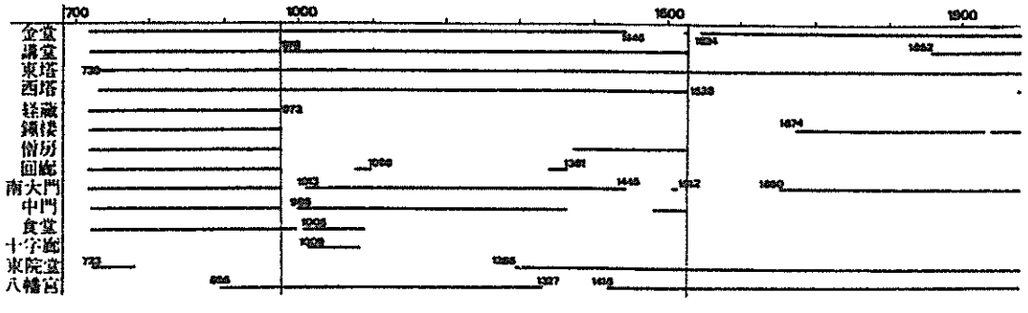


Fig. 1　堂宇興亡表

３．遺構

［講堂］

・柱間寸法、平面規模は、現在調査中だが、１９９０年度調査と同様の状況。
・裳階は未確認。

［回廊］

ａ．単廊

・講堂とりつき部分を含め３間分を検出。以西は複廊基壇土が厚くおおい、未確認。
・柱間寸法は桁行、梁間共に１２．５尺。
・北側の柱間に、瓦を並べた地覆を検出。
・東端部には、基壇上面の舗装である凝灰岩粉末を敷いた面が残る。

ｂ．複廊

・基壇は単廊の礎石を抜き取ったあとをていねいに埋め立て、さらに基壇土を盛土して造成し、凝灰岩による化粧を行なっている。幅９．６ｍ。
・地覆石は残存状況が良く、特に北側はすべて残存。幅２９～３０ｃｍ。
・一部には羽目石も残り、全高（３８ｃｍ）を留めるものがある。
・柱間寸法は桁行１４尺、梁間１０尺２間、基壇の出６尺に復原される。

４．遺物

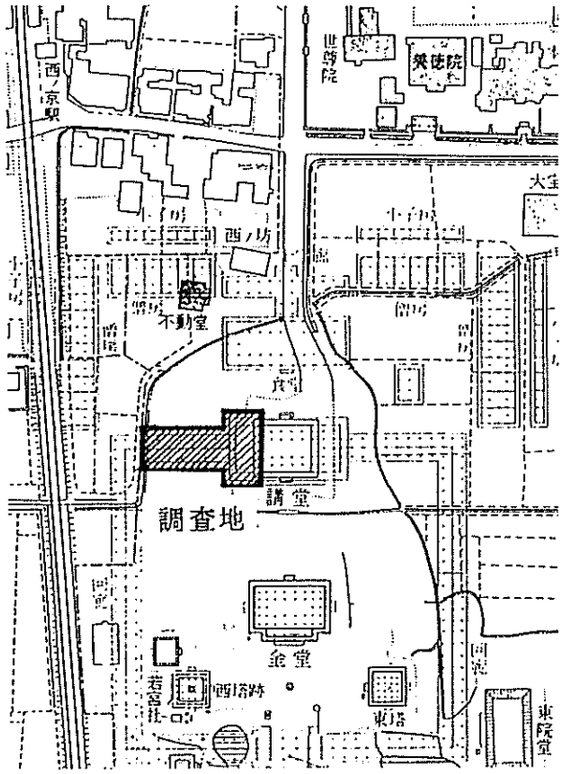
瓦類がほとんどで、土器はきわめて少ない。古代から中・近世に至る多量の瓦片が出土したが、特に講堂周辺の、本薬師寺所用軒瓦が目立つ。

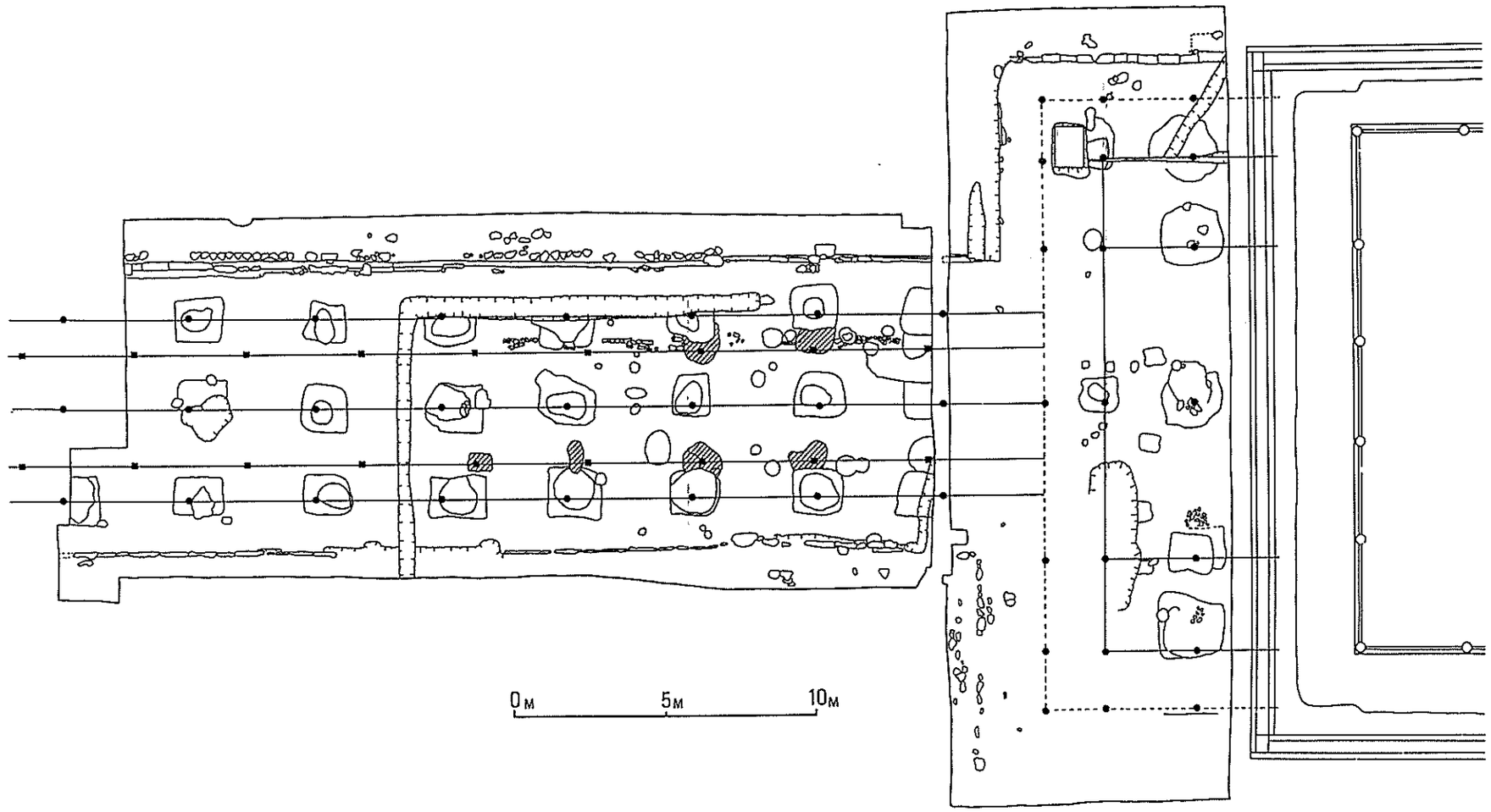
５．まとめ

これまでの回廊の調査では、単廊が複廊に変更された時期について、単廊の礎石を据えた程度の段階で、計画変更を行ったと推定してきたが、今回壁持ちの地覆の瓦列と、基壇上面の舗装を検出したことにより、単廊の建物もある程度は建ち上がっていた可能性が高くなった。この結果これを複廊に改めた時期とその理由の謎がさらに深まったといえよう。

また、講堂基壇は、西面では瓦片を多量に含む整地土上に造られており、その造営時期及び回廊との前後関係についても検討の要がある。

なお、これまでの回廊の調査を通じて、今回は基壇化粧の残存状況がもっとも良好で、基壇高その他の復原に多く資する知見を得たことも、特筆すべき成果の一つである。





遺構平面図

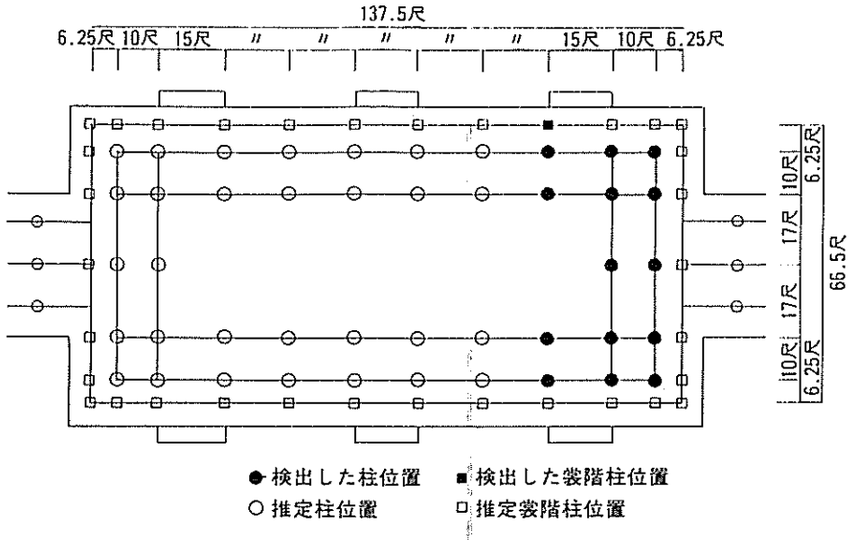
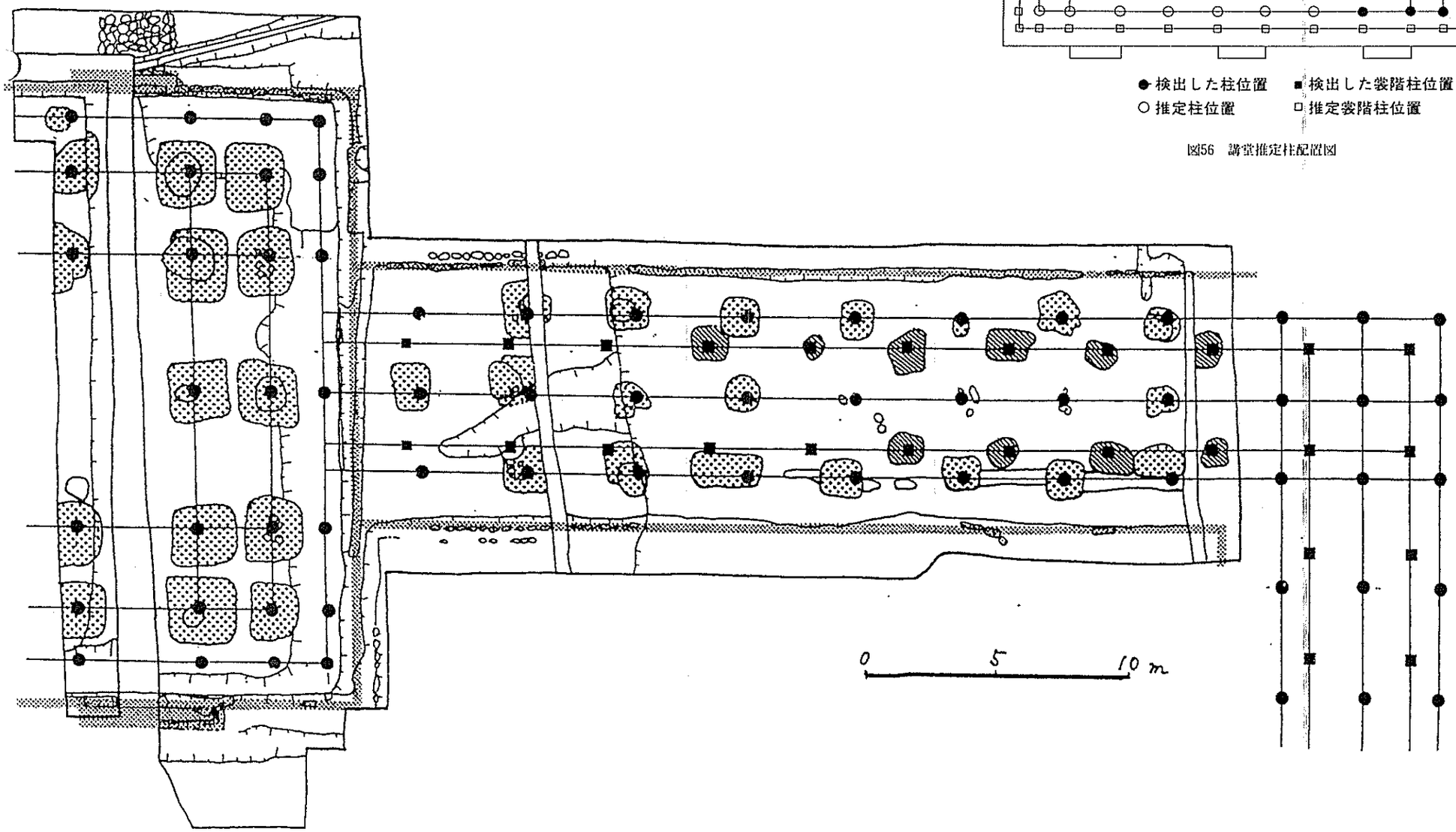
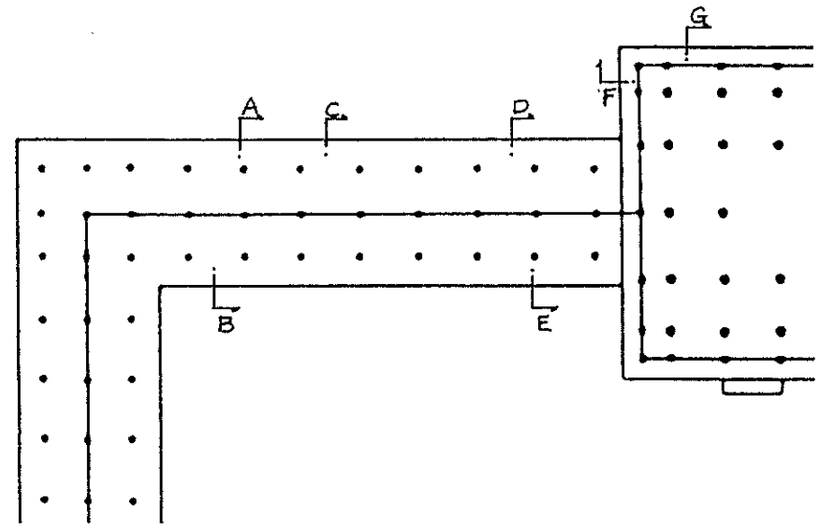
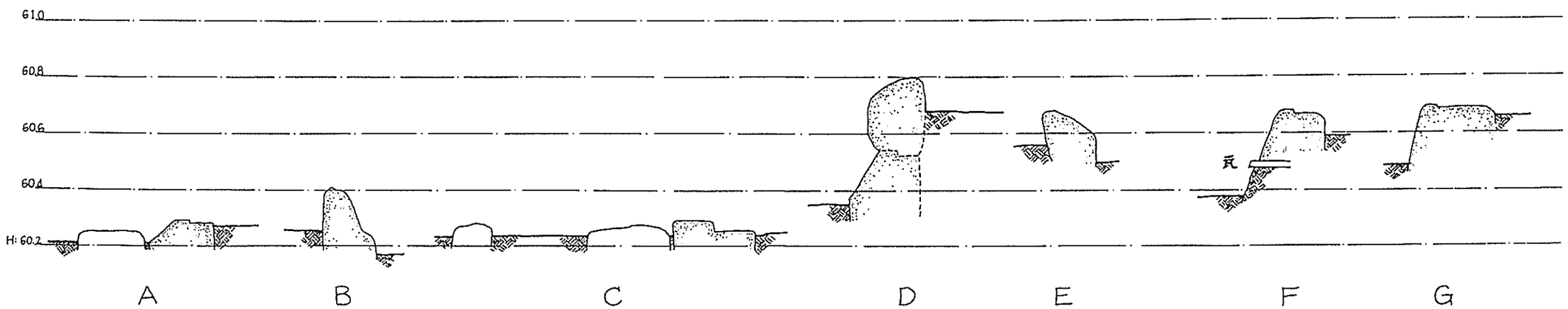


図56　講堂推定柱配置図

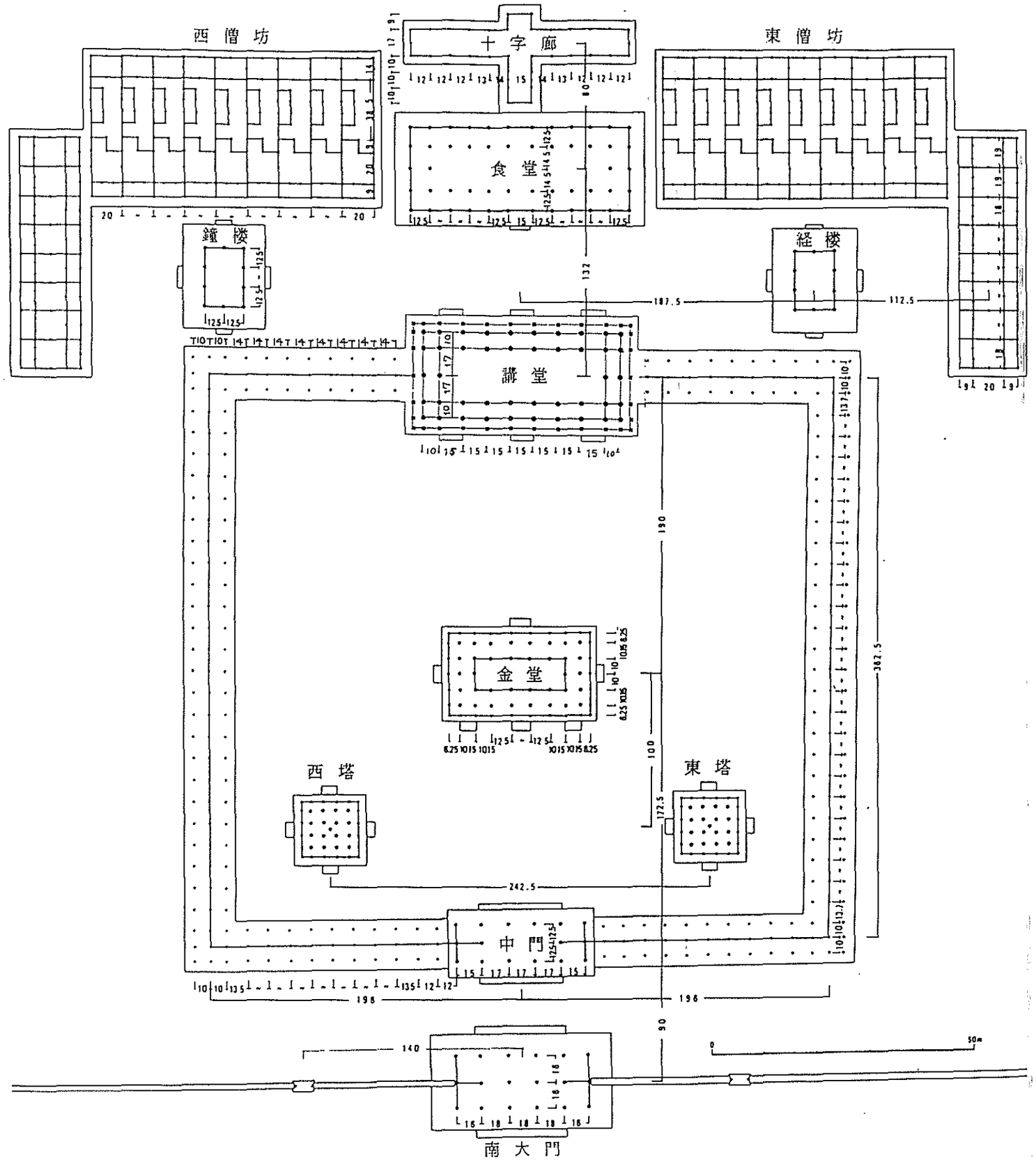


１　９　９　０　年　度　遺　構　図





地覆石断面図



薬師寺伽藍復原図